

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520381

研究課題名(和文) 日本近代詩の外国語翻訳に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of foreign language translations of Japanese modern poetry

研究代表者

佐藤 伸宏 (SATO, NOBUHIRO)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：70148724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本近代詩の外国語翻訳は膨大な蓄積があるが、これまで十分に研究がなされてきてはいなかった。本研究では、とくに英語およびフランス語による翻訳アンソロジーを対象として、それらの翻訳テキストについて書誌的に調査し、その文献データの整理と分析を行った。その上で、最新の翻訳理論を踏まえながら、主要なテキストに関して、その翻訳としての性格自体の考察を進めた。そのような研究によって、アンソロジーの内容および性格の歴史的变化、海外における日本近代詩の理解と受容の実態、そして英語・フランス語圏における日本近代詩翻訳の特質と意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：There is a large amount of translations of Japanese modern poetries to foreign languages, but it hasn't been studied properly up to nowadays. In this study, especially choosing as a target English and French translation anthologies and investigating bibliographical sources of these translated texts, literature data was organized and analyzed. Moreover, being based on the latest translation theories, the investigation proceeded with the great consideration of the original text. By such research, historical and characteristics changes in the anthology content, realities of Japan modern poetry understanding and its acceptance overseas were clarified, as well as the characteristics and significance of Japanese modern poetry translation in English-speaking and Francophone countries.

研究分野：人文学

キーワード：近代詩 翻訳 比較文学 アンソロジー

1. 研究開始当初の背景

日本文学の外国語翻訳に関しては、19世紀末期以降、現在に至るまで夥しい数のテキストが公刊されてきているが、しかしそれらの膨大な翻訳テキストに関する書誌的な調査は、ごく限られた作家や作品を除き、ほとんど手つかずのままであった。またそれらの翻訳としての性格自体についても十分な検討が加えられてきてはいなかった。日本文学の外国語翻訳に関する、書誌的研究および翻訳研究の両側面からの総合的な考察と分析は、原文を正確に読解することの可能な、日本側の研究者こそが積極的に取り組むべき課題でありながら、いまだ未開拓のまま残されていたと言つてよい。

2. 研究の目的

上記のように本研究の発端は日本文学の外国語翻訳に関して新たな研究領域を開拓することにあつたが、しかし現在に至る欧米における日本文学の翻訳は膨大な蓄積があり、それらの網羅的な調査と研究を個人研究として行うことは現実的には不可能と言うほかない。そのため、研究代表者のこれまでの研究歴を活かし、考察の範囲を日本近代詩に限定し、また対象をとくに英語およびフランス語による翻訳文献に限定することによって、以下のように目的を設定した。(1)19世紀末期以降の英語・フランス語圏での日本近代詩翻訳の状況について、基礎的な調査を行い、書誌的なデータを整理して分析を行うこと、(2)日本近代詩の外国語翻訳テキストの翻訳としての性格、特質を明らかにすること、そしてそれによって海外における日本近代詩の紹介、受容と理解の内実を光を当てること。以上の2点を研究の目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的に沿って研究を行うに当たって、とくに近代詩の翻訳アンソロジーを考察対象とすることにした。日本近代詩の翻訳アンソロジーは1930年代以降に盛んに出版されることになるが、それらを網羅的に取り上げ、個々の書誌的事項、収録作品、翻訳に際して用いられた底本、編者による序文その他について調査し、翻訳文献データとして整理した上で、それらのアンソロジーとしての性格、その歴史の変容などについて分析を行った。様々の同時代的要請を背景とした編纂の基準に沿って数多くの詩篇を収録したアンソロジーを考察対象とすることによって、欧米諸国における日本近代詩の紹介、受容の歴史の動向を明らかにすることを試みた。

また翻訳としてのあり方の考察に関しては、前提として現在の翻訳研究の進展の動向を十分に踏まえて分析を行うこととした。かつての翻訳研究は、原文と翻訳との等価性を基準として、原文への忠実さとしての翻訳の正確さを問題とすることが中心的な課題となっていたが、現在では、そうした原文と翻

訳との間の等価関係は多様に設定しうるものとして捉えられ、それによって原文の「異本」としての翻訳テキスト自体の固有の性格を正当に捉えることが翻訳研究の目的として考えられるに至っており、本研究でもそうした翻訳研究の理論的進展を踏まえて、個々の翻訳テキストの性格を明らかにすることとした。さらに翻訳としての性格の考察に関しては各翻訳詩について原詩との比較対照を行うことが基本的な方法となるが、その際、同一詩篇の翻訳が複数のアンソロジーに収録されている場合には、とくに比較翻訳的な分析を行った。同一詩篇の複数の翻訳を相互に比較対照する比較翻訳的な分析を加えることによって、原文との間に多様な等価関係を敷設しつつ成立した個々の翻訳テキストの固有の性格や独自の位置を捉えることを試みた。

4. 研究成果

上記の目的と方法に基づいて行われた本研究をとおして得られた成果を以下に列挙する。

(1)日本近代詩の英語およびフランス語による翻訳アンソロジーは、とくに第二次大戦後の1950年代以降、*Poetry of Living Japan*, translated by Takamichi Ninoyama and D.J.Enright(1957)以下、数多く出版されることになるが、それに先立つ1930年代という突出して早い時期に2冊のフランス語翻訳アンソロジーが公刊されている。すなわち Georges Bonneau 訳の *Anthologie de la Poesie japonaise*(1935)、そして Kuni Matsuo(松尾邦之助) et Steinilber-Oberlin の共訳になる *Anthologie des Poetes japonais contemporains*(1939)である。この時期のフランスにおいて、松尾が序文に述べるように日本近代詩は全く知られていなかったが、これら2冊の仏訳アンソロジーがほぼ同時期に上梓されたのは、その背景として、「ジャポニスム第二の波」「詩歌のジャポニスム」とも称されるフランス・ハイカイ運動が1920年代に隆盛を見せたことが考えられる。それが背景ないしは機縁となつて、それら2冊のアンソロジーが相次いで上梓されることとなつたと考えられるが、しかしまたこの1930年代末には第二次世界大戦が勃発し、これらの翻訳書の後続は断たれることになる。以後、日本近代詩翻訳アンソロジーの出版は第二次大戦終結後ようやく再開されるのであり、外国文学翻訳がこうした歴史的状况の制約の下にあることの例証となっている。

(2)翻訳アンソロジーは、その編者・訳者の編纂の意図や方針によって、収録作品の内容、翻訳のあり方等において大きな相違を見せることになる。上記の2冊の翻訳選詩集にも、そうした差異が顕著に認められる。1929年から10年ほど日本に滞在したボノーは、『万葉集』『古今集』から民衆歌謡に及び広義の韻

文作品の翻訳を行ったが、*Anthologie de la Poesie japonaise*には島崎藤村・北原白秋・佐藤春夫・西條八十の四詩人の詩 30 篇の翻訳が収録されている。それらの選択・編成や翻訳の方法を支えていたのは、他ならぬポノーの日本詩に関する認識であった。ポノーは日本に滞在する中で様々の日本詩に触れることによって、日本の詩の本質を「音律」「音声」「音脚」という聴覚的音楽的要素に見出し、そこにフランス詩と同一の詩的性格を認める。そうした中で、ローマ字表記の原詩とともに収められた近代詩の翻訳は、何よりも原詩の音楽的性格を移植することに比重がかけられている。

一方、*Anthologie des Poetes japonais contemporains*の場合には、明治から昭和に至る主要な詩人をほぼ網羅する全 210 余篇が収録されている。訳者の一人松尾邦之助が、フランス及びヨーロッパにおいて日本近代詩がほとんど知られていないことを「嘆かわしい欠落」として「序文」に述べているように、本書は、日本近代詩に関して無知のヨーロッパの読者に対して近代詩の全容を紹介する最初の翻訳詩集を提出するという意図に根差している。そうした編集・出版の意図に基づくこのアンソロジーにおいては、原詩の形式や音楽性に関してはほとんど顧慮されることがなく、むしろ原詩の意味内容を周到に伝達することが試みられている。従ってその翻訳は、時にほとんど散文に接近した説明的な文体で綴られており、フランスの読者に何よりも理解可能であることを企図したものとなっている。このようにアンソロジーの翻訳は、訳者の意図によって、その構成、内容、そして翻訳の方法において多様なあり方を見せる。そしてそれは翻訳としての優劣に性急に結びつけられるべきではなく、出版の意図を踏まえつつ、詩の翻訳という営為を前にしてそれぞれ自覚的に選び取られた訳出の方法における差異と見做されなければならない。

(3)日本近代詩の翻訳アンソロジーは共訳という形態を取ることが少なくない。そしてその共訳のあり方も実は多岐にわたる。複数の翻訳者それぞれの翻訳を 1 冊に集成する形で出版される場合もあるが、日本人の翻訳者とそこで用いられる翻訳言語を母語とする外国人との共同作業として行われる場合が多い。しかしその場合でも、両者の共同作業の内実は多様であり得る。日本人による翻訳に母語話者が表現上の改変・補訂を加える形で共同作業が進められることもあれば、日本人が翻訳を行う際にその助言者として協力するケースも存在する。共訳という共同作業の内実は多様であり、個々の共訳翻訳アンソロジー全体の性格の形成にそれは直接関わる重要な問題である。一例を挙げるならば、*Anthologie des Poetes japonais contemporains*は Kuni Matsuo と Steinilber-Oberlin の共訳にな

るアンソロジーであるが、その共同翻訳は、松尾によれば、まず松尾が原詩に忠実な直訳的翻訳を試み、そして「日本語の出来ない」オーベルランによって、フランス人読者への配慮の中で、またフランス文学の水準も視野に入れつつ、松尾の翻訳に修正、改変の手が加えられるという複雑な翻訳過程を辿るものであった。松尾はそれに「協訳」という独特の呼称を与えているが、その協働の作業の内実を明らかにすることは容易ではない。ただし松尾は本書出版に先立って、イタリア語訳の日本近代詩アンソロジー *Poeti Giapponesi d'Oggi*(1935)を刊行している。これは松尾のフランス語訳を Lionello Fiumi がイタリア語に直訳する形で成立した訳書であるが、そこに収録されたイタリア語訳テキストと上記の協訳によるフランス語訳との比較対照をとおして、*Anthologie des Poetes japonais contemporains*の翻訳におけるオーベルランの関与を或る程度確認することができる。その点の考察によって明らかになるのは、協訳のテキストに関与するオーベルランを導いていたのは、日本の文学・文化の固有性に関する認識であり、その認識に基づいて松尾訳に改変の手が加えられることによって、異質化、異国化 (foreignization)としての翻訳の性格が強められるに至ったという事実には他ならない。翻訳アンソロジーの成立において、共訳の機構を明らかにすることは極めて重要な課題と言わなければならない。この問題に関しては今後も更に検討を重ねてゆきたい。

(4)松尾邦之助は、上記のアンソロジー以外に、オーベルランとの協訳により 10 数冊の訳書を出版しているが、同時に、長い期間にわたり雑誌 *France-Japon* の編集に当たっていた。*France-Japon* は日仏同志会の機関誌として、1934 年から 1939 年にかけてパリで全 49 冊発行された日仏文化交流誌であるが、南満洲鉄道株式会社(満鉄)が出資していたことに示されているように、国策による海外宣伝雑誌としての性格を備えていた。ただし編集の責任を負った松尾は、日仏文化交流の目的を強く自覚することによって、日本の詩や小説を含む数多くの日本文学の翻訳、そして同時代の日本文壇に関する情報やフランス人を中心とした日本の文化・歴史・自然に関する論文やエッセイも数多く掲載した。それらは、1930 年代後半におけるヨーロッパの日本観・日本イメージを窺い知る上で、この上なく貴重な資料である。そしてこの時期に海外で出版された近代詩を含む日本文学の外国語訳テキストは、そうした当時の西欧における日本観・日本理解を背景とし、またそれとの相関の中で刊行されていたのである。

(5)本研究においては、とくに比較翻訳の方法を積極的に採用した。この方法は、同一詩篇に複数の翻訳が存在する場合に、それらを相

互に比較対照することによって、個々の翻訳テキストの固有の性格や独自の位置を明らかにすることを試みるものであるが、それによって得られた主な研究成果を以下に挙げることにしたい。

先にも述べたように原文と翻訳との等価性は多様に設定されうる。個々の翻訳は、原文の解釈に基づきつつ、それぞれ様々の側面において原文との等価関係を敷設するのであり、それを基軸として一篇の翻訳テキストの成立が果たされる。そうした原文との間に設定される等価関係の所在こそが個々の翻訳テキストの固有性を形成する。例えば萩原朔太郎「艶めかしい墓場」(『青猫』)の場合、現在まで6篇の翻訳テキストが発表されているが、それらの訳詩は相互に著しい相違を見せている。そうした訳詩間の相違は、この難解な朔太郎の詩のいかなる面を焦点化して翻訳を成立させるかという、各翻訳者の翻訳態度の差異によって生じている。詩の翻訳は、訳者の理解や解釈を介して原詩の持つ或る側面を焦点化し、それを中核として全体的調和を備えた一篇の訳詩を生み出す営みとしてある。翻訳詩とは、原詩との対応関係を保ちつつも、原詩の再現とは全く異なる、その意味で原詩とは別の詩として多様に成立するものであることが、こうした比較翻訳の方法をとおして明らかに確認される。

日本近代詩の特徴的な性格の一つはオノマトペ(擬声語・擬態語)の頻出という点にある。そして或る音声や様態を、言語の音によって模倣的に、あるいは象徴的に捉えるオノマトペは、一つの言語体系に属しつつ固有の感覚的な意味伝達を果たす表現として、翻訳不可能性に直面させる典型的な事例に他ならない。日本近代詩の翻訳者は、こうしたオノマトペを前にして、様々の翻訳上の工夫を試み、方法的な選択を行うことになる。一例のみ挙げれば、中原中也の詩「一つのメルヘン」(『在りし日の歌』)は「さらさら」というオノマトペが魅力的に響く詩であるが、本詩には5篇の翻訳が存在する。それらのうち James Kirkup 訳の "Marchen"(*Modern Japanese Poetry*, 1978)は、現在時制の動詞を用い、《and》を繰り返し用いて場面の移行を示すことによって、この詩に展開する場面の現前性を高める。そしてその中で、原詩のオノマトペをイタリック体のローマ字表記として《Sarasarato, sarasarato》という一行を各連最終行に配置し、この表現に脚注を付して、それが流れる水の音を示す擬声語であることを注解するとともに、訳詩中に《rustling》《ripple》という語を補うことによって、上記の《Sarasarato, sarasarato》への補足的な注解としている。そのようにカーカップの翻訳では原詩のオノマトペに対する極めて周到な対処が試みられているが、一方、Yves-Marie Alliou による翻訳 "Un conte de fees"(*Anthologie de poesie japonaise contemporaine*, 1986)の場合には、オノマトペ

そのものの訳出に積極的なカーカップとは異なり、原詩のオノマトペの直接的な訳出は回避されている。この訳詩は、文体の極度の軽量化がはかれる中で、原詩のオノマトペの代わりに、《murmure》《murmurant》という言葉を通奏低音のように響かせていき、そして《L'eau murmurante en murmurant coulait...》の一行で閉じられる。それは、フランス語そのもののリズムと抑揚、音楽性を最大限に活用することによって、原詩のオノマトペとの対応を図る試みとして捉えることができる。オノマトペの翻訳に関しては、オノマトペの音響を目標言語によって近似的に写し取ることや音訳(transliteration)、オノマトペの含意する内容を動詞や副詞・形容詞等に置き換えて表現するなどの方法が一般的であるが、比較翻訳の観点によって明らかになるのは、オノマトペへの対処における各訳者の多様でチャレンジングな試みに他ならない。

比較翻訳の方法は、原詩そのものの新たな理解の契機としても有効に機能する。翻訳が、原文の解釈に基づきつつ、同時に翻訳の言語およびその言語圏の文化の文法、体系に即した整合性を確保しようとするものである限り、翻訳がはらむ偏差や歪曲は自明のことに属するのであり、むしろそれは原文の表現や構造の固有性を照射し、また原文自体について再考を試みる契機となり得る。上記の「一つのメルヘン」を例に取れば、その5篇の訳詩においては、原詩の描き出す事態の不条理性を一定の整合性と了解可能性のもとに呈示し、また原詩の抱える空白を合理的に充填するために、原詩の表現からの逸脱や隔たりをはらみこみつつ、様々の翻訳表現としての配慮と工夫がなされている。それら一連の翻訳テキストは、原詩に希薄な物語構成の論理を補強する方向で、原詩の表現を改変し様々の詩句を付加補入することによって成立しているのである。比較翻訳の方法をとおして確認される以上の訳詩の性格は、取りも直さず原詩の「一つのメルヘン」の備える表現の機構、様態を逆照射していると言うことが出来る。

以上のように比較翻訳の方法によって、原文と翻訳との対比のみでは捉えることのできない様々の問題を明らかにすることが可能となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

佐藤 伸宏、協訳 のテキスト Kuni Matsuo et Steinilber Oberlin, *Anthologie des Poetes japonais contemporains* をめぐって、東北大学文学研究科研究年報、査読無、63号、2014、pp.1-33

佐藤 伸宏、中原中也の可能性(下) 「一

「つものメルヘン」の成立、文芸研究、査読有、
177集、2014、pp14-25

佐藤 伸宏、中原中也の可能性(上)「(ポ
ロリ、ポロリと死んでゆく)」を起点として
、文芸研究、査読有、177集、2013、pp12-22

〔学会発表〕(計2件)

佐藤 伸宏、詩における「ことばの力」、
秋田県高等学校教育研究会、2014年10月24
日、角館広域交流センター(秋田県仙北市)

佐藤 伸宏、協訳 のテキスト Kuni
Matsuo et Steinilber Oberlin, *Anthologie des
Poetes japonais contemporains* をめぐって、日
本比較文学会東北大会、2012年11月17日、
山形テルサ(山形市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 伸宏 (SATO Nobuhiro)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70148724